

第2節 震災の記録と教材の開発

県教育委員会では、震災の経験から得た貴重な教訓を記憶に刻み、確実に次代に伝えていくために、震災への対応について細大漏らさず記録するとともに、被災地の教育委員会、学校、社会教育施設等に対して実施した調査の結果や防災教育協力校（平成8年度指定）をはじめ多くの学校等から提供された資料をもとに記録誌を作成した。

また、震災の教訓に学ぶ「新たな防災教育」を推進する教材として、園児児童生徒の発達段階に応じた防災教育副読本及び手引き、実践事例集等を作成し、それらを活用した防災教育の充実に努めてきた。

1 震災の記録と資料の収集

(1) 『震災を生きて—大震災から立ち上がる兵庫の教育—』（平成8年1月17日発行）



平成7年3月8日、被災地の小学校6校、中学校6校、高等学校2校、盲学校1校を防災教育協力校に指定し、阪神・淡路大震災に係る教育活動の詳細な記録を収集することとした。その膨大な記録は、平成7年4月に設置された防災教育検討委員会において検証・検討され、提言の基礎資料として活用された。

本誌は、防災教育協力校において蓄積された記録を中心として、さらに市町教育委員会、学校、その他多くの方々から各種の資料の提供を受けて編集した震災後1年間の記録である。

全体は5部から成り、「第1部 大震災の爪痕」では、被災した学校施設の写真や図表を用いて被害の全貌を示すとともに、児童生徒の作文や絵によって大震災の恐怖を生々しく伝えている。特に、上記協力校から提供された資料に基づいてまとめた「第2部 復興への道のり」には、震災発生時から混乱と喧騒の中での避難所運営、学校再開に向けた取組が、時系列に沿って克明に記録されており、様々な刊行物に引用されている。また、「第3部 震災をのりこえて」では、児童生徒及び教職員の震災によるストレスの事例を多数収集し、「心のケア」の取組を進める基礎資料として活用された。それに、第4部防災教育検討委員会の提言、第5部資料を加えた構成である。

(2) 『明日を見つめて—社会教育と阪神・淡路大震災—』（平成8年3月31日発行）

震災では、社会教育の分野でも県下186の社会教

育施設が被害を受け、公民館をはじめとする多くの社会教育施設が避難所となった。

そこで、県教育委員会では、「社会教育と阪神・淡路大震災」記録調査事業企画実施委員会を設置し、災害救助法対象の10市10町はもとより、県下全市町を対象に調査を実施した。調査は、「社会教育課の災害への対応について」「社会教育施設の対応について」「社会教育施設における避難住民への対応について」「社会教育関係団体の災害への対応について」である。本誌には、その結果の分析とそれを踏まえた座談会「阪神・淡路大震災の教訓を生かしたこれからの社会教育」を収録している。さらに資料編には、自由記述の調査項目の回答を多数掲載し、生の声を伝えている。



(3) 『阪神・淡路大震災に学ぶ（資料編）』 CD-ROM（平成9年3月）

平成7年度に文部省の「学習用ソフトウェア」研究開発の委託を受け、県立教育研修所が中心になり防災教育学習用ソフトウェアの開発に取り組んだ。収集した写真、作文等に加えて、報道機関から映像資料や音声資料の提供を受け、本ソフトには、動画91点、写真・画像473点、音声データ14点、作文・テキスト79点、グラフデータ45点 合計702点を収録している。

本ソフトは、「防災・安全教育」に活用することを第一義として作成したものであるが、社会科や道徳、あるいは情報活用能力の育成に有効に活



用できるよう工夫している。

シミュレーション編「あなたの部屋は安全か」は、身近な部屋の家具配置の危険性を予測し、その対策の必要性を認識させることをねらいとしている。また、本ソフトは、プレゼンテーション機能を備えており、情報の検索や取捨選択を行った後、その情報を用いて児童生徒が発表用の資料を作成することができるようになっている。

(4) 震災関連資料の収集(平成13年6月～9月)

震災関連の資料の散逸を防ぎ、次代に語り継ぐ資料として保管するために、阪神・淡路大震災記念協会等と連携して資料の収集を行った。避難所での記録、写真、各学校が作成した記録集や文集、ビデオ、

全国から寄せられた励ましの手紙等に加え、震災以降各学校で作成した「防災教育カリキュラム」や「災害対応マニュアル」なども含め、合計6,434点を収集した。

その後、収集した資料は、平成15年4月に開館した人と防災未来センターに引き継がれ、同センターが所蔵し、展示・活用されている。

2 防災教育副読本の作成

震災の教訓を生かし、学校における安全教育の充実と、生命の大切さや人間としての在り方生き方を考えさせる学習を、継続的・総合的に推進していくための補助教材として防災教育副読本を作成した。

〈防災教育副読本題材一覧表〉(小学校低・高学年用、中学生用)

柱	視点	小学校1・2・3年生用	小学校4・5・6年生用	中学生用
人間としての在り方・生き方にせまる	生命の尊重	いろんな 気もち わたしの シロ 春が きた	明日を信じて 何も考えられない 12時にサイレンが町中にひびいた 悲しみを乗り越えて 今日は 青い日	生かされている 語りかける目 If…『生きる』という時間を求めて
	人と人とのふれあい	とても こわかったよ おばあちゃん これ ありがとう ひとつに なった 元気で よかったね いつまでも わすれない ぼくの 車いす ガスの 工事に きた お兄ちゃん	ぼくは一人じゃない お父さん ともに支えあって 新しいなかま おばあちゃん 風呂に入りよ わたしにとっての地震 花と水 仮設住宅	絶対に、こんなことで死んでたまるか 共に生きる心をもって それぞれの学校生活 きびしさの中で 心がひとつに ゆれる心
	ボランティア精神	水くみ したよ	何かしたい 役に立ちたい ぼくらも何かをしよう	広がる支援の輪 今 自分にできること 人の温かさ
自然的・社会的要因をつかむ	自然的現象	しんぞうが とまりそうだった 大地しんが きた	生きている地球 地震 知っていますか 大地がゆれ動いた 土地の様子と災害	みんなが感じた地震のゆれ 大地が裂け、街がこわれた 地震発生のメカニズム
	社会的現象	ぼくの 町が なくなって しまった おふるに はいったよ 水が でた	とつ然 街がこわれた その時から学校は ひささかれた ライフライン	夜明け前 突然に 断たれたライフライン 避難所となった学校
今後の防災体制を考える	地域の災害体制づくり	あなたの まちは 大じょうぶ? ぐらっと くる 前に	災害について考えよう 防災会議を開こう	兵庫の災害 災害に強いまちづくり
防災行動をとる	防災行動	地しんが おきたら 校区を 歩いてみよう	地震がおきたら 防災マップをつくろう	防災会議を開こう 防災マップをつくろう 災害時の応急処置

『明日に生きる』(小学校低学年・高学年用、中学生用)
平成9年1月17日発行
『明日に生きる』(高校生用)平成10年1月17日発行
『あしたもあそぼうね』(幼稚園用)平成10年1月17日発行



ここでは、小学校低学年・高学年用及び中学生用を中心に、副読本の編集方針及び内容について紹介する。

副読本は、「新たな防災教育」の推進に資するものとするため、次の4つの柱及びそれぞれの視点を設定している。収録されている題材は前ページに示したとおりである。

被災地域はもとより各地域から収集した児童生徒の作文や詩、体験記、絵画、写真等に素材を求め、生きる希望や感動を覚える作品を採用した。さらに、新聞記事や統計資料等さまざまな分野から幅広く素材を収集し、それらを、震災からの時間的経過に沿って配列している。

副読本は、各教科、道徳、特別活動等の学習内容との関連を図りながら、全領域で活用することができるよう作成されている。各学校において、自校の教育課程に位置づけ、独自の防災教育カリキュラムに基づいて計画的に学習することによって、「新たな防災教育」をより効果的に実践することができるものである。

高等学校用は、「Ⅰ 災害時の生活・危機管理」「Ⅱ 社会生活・福祉・ボランティア」「Ⅲ 自然災害」「Ⅳ 保健安全」から成り、様々なデータや資料を駆使して、地震発生のメカニズムや災害対応についての科学的・社会的理解をさらに深めるように構成されている。自宅の耐震性を自己診断するなど、演習の要素も盛り込んでいる。

幼稚園用の絵本は、読み聞かせなどによって、「自然の恐ろしさ」や「命の大切さ」「親への信頼」「友達を思うやさしい心」など、ひととして根源的な大切なものを感じ取らせることができるように編集されている。

各学校での、副読本の活用を図るため、「活用の手引き」及び「実践事例集」を作成、配布した。なお、『学校防災マニュアル』(平成10年3月発行)と『明日

に生きる』を活用した防災教育実践事例集」の中に、防災教育カリキュラムのモデル案を示している。

〈活用の手引き〉

『『明日に生きる』活用の手引き』(小学校用、中学校用)
平成9年3月発行
『『明日に生きる』活用の手引き』(高等学校用)
平成10年3月発行

〈実践事例集〉

「防災教育副読本『明日に生きる』を活用した防災教育実践事例集」(小学校編、中学校編)
平成11年1月発行
「防災教育実践事例集」(高等学校編)
平成11年1月発行
「地域素材を生かした防災教育実践事例集」
平成12年3月発行

「活用の手引き」は、それぞれの題材ごとに、「1ねらい」「2 内容の取り扱い(関連する各教科、道徳及び特別活動等を示す)」「指導にあたって」等について簡潔にまとめている。

「実践事例集」(小学校編・中学校編)は、各学校における各教科や道徳、特別活動、「総合的な学習の時間」での実践を踏まえて、単元の構成や指導計画を示した上で、1時間の授業を取り上げて授業の展開を、板書計画や児童生徒の活動内容を含めて具体的に記述している。

「実践事例集」(高等学校編)は、県立高等学校7校の実践事例をまとめたものであり、学校の特色を生かしたものの3事例、地域の特色を生かしたものの4事例が取り上げられている。

- Ⅰ 「総合学習」の試み(太陽光発電システムの活用)…学校に設置された太陽光発電システムを生かし教科の枠を超えた総合学習としての取組
- Ⅱ 共に生きる社会を目指して…学校の特色を生かした国際理解の観点からの取組
- Ⅲ 生きる力を育む防災教育…学校のある地域における防災計画を調べた取組
- Ⅳ シミュレーションソフトによる防災教育…近隣の研究センターの助言に基づくコンピュータを活用した取組
- Ⅴ 山崎断層による地震に備える…学校の近くの活断層による地震を想定した取組
- Ⅵ 北但大震災に学ぶ…学校図書館に保管されて

いる過去の大震災時における生徒のボランティア活動の記録を生かした取組
 VII野島断層を通じて防災を考える…野島断層を教材とした取組

なお、県立高等学校長協会では防災教育推進委員会を組織し、平成9年度に『防災教育指導案集－阪神・淡路大震災は何を語りかけたか－』（平成10年2月発行）を発行している。

〈防災教育副読本『明日に生きる』を活用した防災教育実践事例集〉（小学校編）

1年	道徳	出来ることは進んで行く	「水くみ したよ」
	道徳	生活に必要なものを大切に	「おふろに はいったよ」
	特別活動	教室で地震にあったら	「地しんが おきたら」
2年	道徳	生命あるものを大切に	「わたしの シロ」
	道徳	感謝の気持ち	「ありがとう」
	道徳	小さな思いやり	「おばあちゃん これ」
	特別活動	地震災害に備えて	「しんぞうが とまりそうだった」
3年	国語	詩を読もう	「ぼくの 町が なくなって しまった」
	道徳	かけがえのない命	「とても こわかったよ」
	道徳	たくましく生きる	「いろんな 気持ち」
	特別活動	校区しらべ	「校区を 歩いてみよう」
	総合的な学習	災害に備えよう	「ぐらっと くる 前に」
4年	道徳	家族のきずな	「ぼくは一人じゃない」
	特別活動	大地震に備える	「防災会議を開こう」
	総合的な学習	わたしたちの町はだいじょうぶ？	「災害について考えよう」
	総合的な学習	地域の災害を知る	「生きている地球」 「大地がゆれ動いた」 「土地の様子と災害」 他
5年	道徳	みんなのために進んで行おう	「何かしたい 役に立ちたい」
	特別活動	防災意識を高めよう	「地震がおきたら」 「防災マップをつくろう」
	総合的な学習	災害と私たちの暮らし	「ひきさかれた ライフライン」
6年	理科	大地のでき方	「地震 知っていますか」
	道徳	希望と勇気を持って生きる	「明日を信じて」
	総合的な学習	障害者とともに	「わたしにとっての地震」
全学年	特別活動	避難訓練及び初期消火訓練	
	特別活動	下校時の避難訓練及び保護者への引き渡し訓練	

※「 」は、防災教育副読本『明日に生きる』の題材名

インタビュー

防災教育副読本「明日に生きる」への思い

防災教育副読本編集委員会の委員長を務められた杉山明男神戸大学名誉教授に、副読本作成への思いや、副読本を活用した「新たな防災教育」の取組について聞いた。

先生のお住まいは神戸市東灘区ですから、先生ご自身も被災されたのですね。

1月16日の夜は、たまたま当時勤めていた岡山の大学に泊まっていたので、幸いあの激しい揺れを直接は体験しなかったのですが、翌朝、とんで帰ってみるとあたりは一面がれきの山でした。我が家はずいぶん古い家なんですけど何とか持ちこたえていました。しかし、阪急の線路からずっと南の方は風景が一変してしまっていて、学生時代に体験した東京大空襲のときの記憶と重なりました。これは大変なことになったという衝撃とともに、自分が生き残ったことへの感謝の思いがこみ上げてきました。

平成8年4月に防災教育副読本の編集委員会が設置され、先生にはその委員長として作成に携わっていただいたわけですが、副読本作成への先生の思いをお聞かせください。

震災直後は、教科書もなければ、鉛筆もない。その後、全国各地から教科書や学用品が被災した子どもたちに届けられるわけですが、当初は何もなかった。そんな中でも、紙と鉛筆さえあれば子どもたちは表現することができるということで、震災の体験や思いを言葉にする、作文や詩を書く取組が多くの学校でなされました。そうして生まれた子どもたちの作品がそれこそ無数にあったわけです。それを編集して教材にしようと考えました。

1,000編を超える作品が集まったと思います。その中に、「せっかつすかつたいのち わたしはちゃんと



県庁3号館10階教育委員室にて（平成16年11月18日）

生きていきたい」(小学校1・2・3年生用所収)という小学生の詩の一節に出会って、「これだ」と思いました。「命の大切さ」、これを編集の第一の柱に据えました。

震災では6,400余名の方が犠牲になりましたが、その中で多くの子どもたちが友人を亡くしました。昨日まで机を並べて勉強していた友人を突然失った現実戸惑いながら、「さよならはいいません」と作文に書いている。私は、ここには、友人への愛情—いや、人間への愛情と言ってもいい—があふれていると思うのです。こうした思いは、友人を失った多くの子どもたちに共通するものだったと思います。

また、震災の後、子どもたちががんばりました。お母さんが水をバケツに汲んで、マンションの8階と1階との間を何度も往復しているのを見て、「ほくもペットボトルをもって水くみに行ったよ」(小学校1・2・3年生用所収)と書いている。子どもたちは、こうした行動を通して労働の原点に出会い、支え合って生きているということを学んだ。

子どもたちの作文や詩には、「生命」「愛情」「労働」「集団」という人間の原点ともいえるものがいっぱい詰まっている。これを土台にして副読本を編集していきました。

先生にとって一番思い出深い作品はどれですか。

特に印象深いのは、中学校用副読本に収めている「心がひとつに」です。仮設テントで行われた卒業式。震災で亡くなったキタイチカコさんの名前が呼ばれたとき、「『はい!!』クラス全員で返事をした。クラスがひとつになった」と綴られています。私はこの作品を声に出して読むとき、今でも胸に迫るものがあります。

先生には毎年防災教育推進指導員養成講座の講師をお願いしていますが、その中で必ず「心がひとつに」を読み聞かせてくださいます。先生は「読み聞かせ」の持つ力をどのようにお考えですか。

私がこの作品を朗読していると、受講者の中には目頭をおさえて聞いてくださる方がいる。それは、私

の朗読が上手だなんてことではなくて、子どもたちが自分の思いを素直に言葉に表したという事実の持っている重さが心を揺さぶるのだと思います。

震災直後のことです、ペしゃんこにつぶれた家の板きれに、消し炭で「この下に私のお父さんとお母さんが埋まっています どうか踏まないでください」と書いてあった。これを書いた子どもの祈るような思いが伝わってきます。震災の体験を通して、「人間は言葉を使いこなす動物だ」ということの意味を改めて考えさせられました。言葉は心の内にある思いや願いに形を与える、そしてそれが人と人をつなぐ。震災の極限状況の中で、言葉は「命」や「愛情」といった人間にとって根源的なものをすくいとった。子どもたちの作文や詩には、それが実に素直に表現されている。うそがない。「読み聞かせ」は、そうした作品に込められた書き手の思いを伝える効果的な指導法です。それだけに、読み聞かせる教師には言葉に対する厳しい姿勢が求められるということです。

副読本を有効に活用するにはどうしたらよいのでしょうか。

先ほど「読み聞かせ」の効用についてお話しましたが、それ以外にも、子どもたちが朗読や群読をしたり、深く掘り下げて読解したり、感想文を書いたり、さらにそれをもとに話し合ったり、活用方法はいろいろあると思います。

副読本は授業で使うことを前提として作成しました。国語や社会、道徳、あるいは学級活動、それから「総合的な学習の時間」など、様々な授業で活用することができます。調査（「防災教育実態調査」）によると、小・中学校では、8～9割の学校が何らかの形で防災教育副読本を活用しているそうだから、是非ともその実践を持ち寄ってお互いの実践交流の機会を持つことができればいいなと思います。こんな場面で子どもたちの目が輝いたといった成果を蓄積することこそが、副読本の有効活用につながります。また、子どもたちの反応が今ひとつだということであれば、改訂も視野に入れた検討が必要です。そうすることで、副読本に新たな命が吹き込まれていくのです。

副読本を生かすも殺すも教師である、教師の思想性や力量が問われていると言ってもよいと思います。



平成16年度防災教育推進指導員養成講座〔初級編〕で、「心がひとつに」を朗読する杉山先生（平成16年6月17日、県立教育研修所）

最後に、先生のこれからの抱負をお聞かせください。

はじめにもお話ししましたが、副読本作成の原点に「命」ということがある。そこには、「生きる」という意味の命と、「生きることを輝かせる」という意味の命がある。震災直後はまさに「生きる」ということがすべてだった。人々はお互いに助け合って命を救い、懸命に生きた。あれから十年経って、これからはさらに生きることを輝かせるという普遍的な原理に則った教育実践を積み重ねていかなければなりません。副読本にもそうした要素が随所に埋め込まれています。

かなうなら、副読本を使った授業をどんどん観てみたい。副読本の作成に携わった者としてアドバイスできることがあると思います。また、どんな小さな集まりでもいいから、呼んでいただければ手弁当で出かけていきます。それが私に与えられた使命だと思っています。

杉山明男先生 略歴

大正14(1926)年。東京大学文学部教育学科卒業。教育学博士。神戸大学名誉教授。授業分析、特に文学の授業の分析と評価に関して業績多数。教育研究への長年の功勞により平成16年瑞宝中綬章を受章。

実践事例5

ここをつないでいくことが一番大切なんだね～阪神・淡路大震災で学んだことを受け継いで～

三田市立本庄小学校

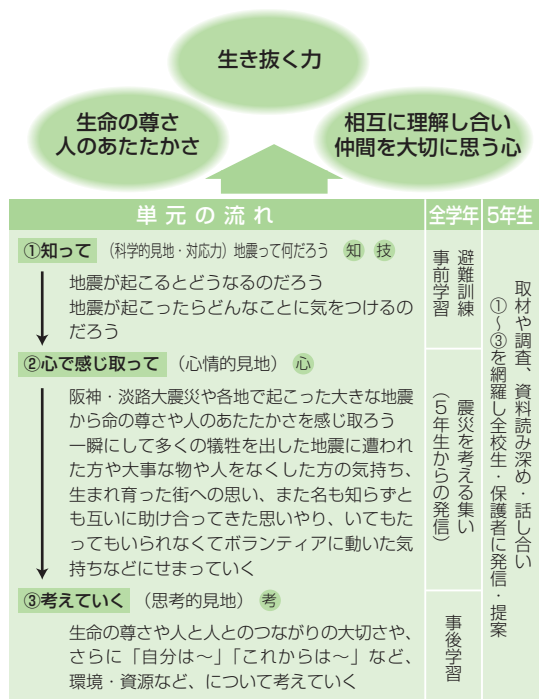
1 単元設定とねらい

本校は、三田市の東北部に位置し農業・畜産が営まれる山あいの地域である。武庫川上流であり、かつては浸水したこともあるが、護岸改修により半世紀にわたって水害には見舞われていない。また地質は岩盤できてきているため、地震にも強い地域と言われているが、豪雨では土砂災害の危険性がないわけではない。その他種々の災害に対する危機管理は必要である。

そこで3年前より、本校の特性に応じた安全防災マニュアルの作成に着手し、それに基づいた防災学習・訓練を行っている。また本校は教育課程の中核に命と人権を据え、「人と豊かにつながる子」をテーマに実践研究に取り組んでいる。各教科全領域を通して基礎基本の力をもとに、「人との関わり方」や「表現力」といった観点で、テーマへ向かって学習に取り組んでいる。

年間カリキュラムの中に、本単元を中心的単元として位置づけている。つまり、防災学習は命と人権の学習というとらえ方である。全学年が系統立てて取り組めるよう安全対策委員会が、各学年の実践内容を検討している。

2 単元の構想



3 学習の展開

毎年1月17日「避難訓練及び震災を考える集い」を設定している。事前に、①知ってとして、各学年に応じて地震とは何かや、地震の際の注意事項や避難方法について学習し、避難訓練に臨む。避難完了後、全校生そろって地震のメカニズムや阪神・淡路大震災について学習する。

本年度は大震災で被害を受けた当時の神戸・宝塚・西宮市内の学校園の写真を提示して、自分の学校と照らし、もし今地震が起こったら…と考えさせた。できる限り被害を減らす工夫として、身の周りの物の配置や安全性を見直したり、いつ災害が起こっても安全で敏速な避難が行える環境として、避難経路や出入口に物を置かないなど、危機管理の意識について考えたりした。

昨年度は阪神・淡路大震災の内容と県内にある断層を紹介し、いつどこで地震に遭うかもしれないということを考え、教室(または体育館・階段・廊下・家など建物)の中にいる時、運動場など広い場所にいる時、バスなどに乗車中や公共の場所にいる時、登下校中などさまざまな場面を想定して危険性及び対処法を考えた。

5年生は2学期末より副読本「明日に生きる」ほか被災者の手記や道徳教材「ともだち」「ほほえみ」や児童作文集「どっかんグラグラ」などを活用し、②心で感じ取るや③考える部分を深める。冬休み中の調査・取材も含めテーマに迫っていく。「震災を考える集い」で、発表・提案し、全校生で考えていった。



写真や資料を活用して説明



「命の尊さを伝えるにはこの詩の朗読があうよ」

【5年生の発表の内容（抜粋）】

「1995年1月17日午前5時46分／阪神・淡路大震災が起こった／今から9年前、ぼくたちが1歳だったころのことだ／ぼくたちは震災のことは何も知らない／だから震災のことを学習した／なくなった方々の命をむだにはできない。震災のことを伝えていこう」「燃えているのに消防車が来ない。妹が…」



避難所で… ボランティアの方の炊き出しの風景を実演

「ごめんな、みんなにあげたいから一人一つにしてなあ。」「生きるために必要な物を届けてくれた県内外のみなさん／やさしさとその行動が元気づけてくれたはずだ」



だれともつながる意味で手話を入れた

歌「語り合おう」（鈴木邦彦作曲）

君と共に 語り合おう	君と共に 語り合おう	君と共に 語り合おう	君と共に 語り合おう	君と共に 語り合おう	君と共に 語り合おう
みつめあおう 語り合おう	みつめあおう 語り合おう	みつめあおう 語り合おう	みつめあおう 語り合おう	みつめあおう 語り合おう	みつめあおう 語り合おう
苦しみを 分かち合おう	苦しみを 分かち合おう	苦しみを 分かち合おう	苦しみを 分かち合おう	苦しみを 分かち合おう	苦しみを 分かち合おう
すばらしいな ま	すばらしいな ま	すばらしいな ま	すばらしいな ま	すばらしいな ま	すばらしいな ま
ほほえみが 今	ほほえみが 今	ほほえみが 今	ほほえみが 今	ほほえみが 今	ほほえみが 今
やさしさが 語り合おう	やさしさが 語り合おう	やさしさが 語り合おう	やさしさが 語り合おう	やさしさが 語り合おう	やさしさが 語り合おう
みつめあおう 語り合おう	みつめあおう 語り合おう	みつめあおう 語り合おう	みつめあおう 語り合おう	みつめあおう 語り合おう	みつめあおう 語り合おう
君と共に 生きていこうよ	君と共に 生きていこうよ	君と共に 生きていこうよ	君と共に 生きていこうよ	君と共に 生きていこうよ	君と共に 生きていこうよ

「うれしいこともあったね。がんばろう神戸！を合い言葉に勝ち取ったプロ野球のオリックスの優勝／ルミネリエの光／新しい命の誕生」「震災でうしなったものは数え切れない。けれども震災から学んだこともいっぱいあったことを私たちは知った／命の大切さ／いろんな人の気持ち／目には見えない物がはっきり見えた／水のありがたさ／電気のありがたさ／ガスのありがたさ／ボランティアのありがたさ／助け合いの大切さ／思い合い／友情」「日本もどこの国の人もみんないっしょ、助け合っていきっていく」「なくなった人の分も希望を持って生きていこうと思う」「心をつたえあい、支えあい、今生きているこの命を大切に生きていきたい」

二部合唱「しあわせ運べるように」「語り合おう」には、一人ひとり自分の「人として大切なこと」をこめて響かせていたように感じる。

発表の最後「みなさん ぼくたちといっしょに心をつないで歌いましょう」の投げかけに『友だちになるために』を全校生で合唱。全校あげて考えていくという意気を感じた。

【他の学年からの感想・意見（抜粋）】

- (1年) 地震がこわいとわかりました。
- (2年) 建物がこわれたりして、水もでなくなってしまうのがびっくりしました。
- (3年) 家族や大事な飼い犬も死んじゃったりしてすごくつらいと思います。
- (4年) もともとは震災は知らないけど困ったときは助け合うのが大切だと分かりました。
- (6年) 5年生が伝えようと心一つにして発表しているのがじーんとしました。みんなで力を合わせればつらいことも乗り越えられると思いました。自分にできることは何か考えようと思いました。

集いの後、学年に応じて副読本「明日に生きる」を活用し「生き抜く力」「生命の尊さ」「人のあたたかさ」「相互に理解し合い、仲間を大切に思う心」の学習を深め、まとめとした。

「明日に生きる」より本単元に有効であった教材

	知 技 科学的に知る 対応策を知る・できる	心 心ころで 感じ取る	考 自ら考える
1年	ぼくの町がなくなってしまった	わたしのシロ	
2年	ぼくの町がなくなってしまった しんぞうがとまりそうだった	わたしのシロ	ありがとう
3年	しんぞうがとまりそうだった とてもこわかったよ	ひとつになった	
4年	何も考えられない	(低) ひとつ になった	何かしたい 役に立ちたい
5年	全編から発表に向けて		明日を信じて
6年	全編を総合的に扱って		明日を信じて

4 成果と課題

「震災当時の被災の状況を知って本当におそろしいと感じた。テレビで今度南海地震などの大きな地震が起こると聞いてこわかったけど、今回の学習で被災した人も必死に生き抜こうとしているのを知り、僕も明日に向かって強く生きていこうと考えるようになった」3歳の時、須磨区で被災し本庄にやってきた児童は「今回の学習で震災の本当の怖さを知った。仲間と助け合うことの大切さも学んだ」と取材に来ていた記者に答えていた。事後学習で自分の住む地域の防災マップ作りに取り組むなど発展性も見えた。3年前から取り組んできたが、避難訓練や単なる防災指導だけでは個々の心にまで響く本当の意味での「新たな防災教育」にはならない。科学的・心情的・思考的の三つの見地から深めていくことが効果的だと考えている。